総合研究（2021-2023 年度）最終報告

研究部門	(Ⅰ) 地方創生 ・ (Ⅱ) S D G s <small>※丸で囲む</small> 重点 ・ 関連	2021～2023 年度
分担研究テーマ	道庁スルーと地方創生	
研究者名	法学部 山本健太郎	
研究目的	近年の北海道における地方政府と中央政府の関係を考える際、基礎自治体が北海道庁を経由せずに直接中央政府とやり取りをし、政策を推進しようとする「道庁スルー」なる現象が指摘されるようになって久しい。いわゆる地方創生が中央政府主導で進められるようになったことと、「道庁スルー」現象の関連性を探る。	
経過報告	<p>【2021 年度】 主として、文献調査を進めた。</p> <p>【2022 年度】 文献調査により、当該テーマでの研究継続は困難との結論に至った。さらに、6 月末より米国での在外研究に出発したことで、物理的にも研究の継続が困難になった。</p> <p>【2023 年度】 6 月末に帰国したが、引き続き特段の研究は行っていない。</p>	
総括	<p>【成果と課題】</p> <p>文献調査の結果、「道庁スルー」なる現象は、地方創生以前からの北海道をめぐる独特な中央地方関係にその源流があるとの中間的な結論を得た。そのため、地方創生という近年の国策と「道庁スルー」を結び付けて論じることにはそもそも困難が伴い、総合研究全般の目的との整合性も十分に取れなくなることが予想されたため、やむなく研究を中断するとの判断に至った。</p> <p>広く知られているように、北海道では、かつて存在した北海道開発庁において、いわゆる開発予算が国直結で執行される体制があり、沖縄を除くその他の都府県とは異なる中央地方関係が敷かれてきた。そのため、市町村が道庁よりも国（開発庁）の顔色を窺うという構造は、かねてから存在してきたということが出来る。道庁自身も、国との関係は一定程度重視せざるをえず、この構造の下では市町村にとって道庁との関係の背後にある国の存在を意識するよりほかない。</p>	

他方、第二次安倍政権以降進められてきた地方創生という政策は、「我が国における急速な少子高齢化の進展に的確に対応し、人口の減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していく」（まち・ひと・しごと創生法第一条）ことが目的とされている。そのために、地方自治体に地方版総合戦略の策定を促し、地方創生の施策事業に取り組むことで、当該自治体には地方創生関係交付金が交付される。

この仕組みのもとの基本的なコンセプトとして、「地方の自立につながるよう地方自らが考え、責任を持って「総合戦略」を推進し、国は伴走的に支援することが必要」（「まち・ひと・しごと創生総合戦略 2015年版」7ページ、<https://www.chisou.go.jp/sousei/info/pdf/20141227siryou5.pdf>）という考え方が述べられている。ここで謳われた「地方の自立」と国の「伴走的」な「支援」という考え方をベースにすると、「地方」が基礎自治体である場合、そこに都道府県の役割はそもそも含まれず、直接国が伴走するという建付けになる。つまり、地方創生という政策には、そもそも基礎自治体にとって「道庁スルー」になる構造が内包されているといえることができる。

その意味で、地方創生がスタートして以降に「道庁スルー」なる現象に注目が集まったのは必然ともいえるが、問題はこの構造が初めて現出したものであるのか、という点である。前述したように、北海道にはそもそも国が予算を直轄して行使する仕組みが備わっており、そこでの国と北海道内の自治体の関係は、国が先導して自治体が追走するという構図であった。地方創生によって、国と自治体の「走る順番」は入れ替わったかもしれないが、地方創生には「地方の自立」と言いつつ、国の関与が依然として大きく、真の意味で自立を促す仕組みになっていないとの指摘も可能である（磯崎 2021）。地方創生関係交付金の交付が国によって決められる以上、その獲得を目指す自治体は、国の顔色を窺うよりほかないからである。このように考えると、「走る順番」は見た目上、あるいは建前上の入れ替えにすぎず、自治体が国の意向を織り込みながら行動する従来型の中央・地方関係が継続しているとみる方が実態に即しているといえる。

とはいえ、実態としては以前との違いも生じている可能性はあり、この点はそれ自体興味深い論点であるが、理論的な転換の有無に関心を向ける筆者にとっては、リーチを超えた課題である。

（参考文献）

磯崎初仁. (2021). 「地方創生施策の展開と地方分権 —「目標管理型統制システム」の有効性 一.」『自治総研』47(511): 1-39.